



図書館にある光

清水 美佐

昨年のはじめにCOVID-19で生活が一変して以来、今では会議、学会、研究会など様々な集まりがオンラインで開催されることが当たり前ようになってきた。自宅にいなから参加できるのは便利だが、同じ場にはいないことの不自由さもやはりある。海外へ研究調査に行かれない状況は現在も続いている。私はビザンティンの聖堂装飾を主な研究対象とするため、現地で実物を見ることは欠かせないが、以前のように出られるまでにはもうしばらく時間がかかりそうである。

こうした時、インターネット上で閲覧できる画像データベースはいっそう重要となる。聖堂のものだけでなく、アイコンや写本などのデータベースも利用している。聖堂装飾にある図像よりもさらに古い作例が、写本装飾などに残っている場合があるからである。たとえば出エジプト記3章1-6節の「モーセと燃える柴」の主題を見てみよう。ホレブ山にやってきたモーセは、燃えているのに燃え尽きることのない不思議な柴を見つける。柴の中に主の御使いが現れ、モーセに呼びかける声をする。聖なる地であるから履物を脱ぐようにとの言葉ののち、その声は自らが神であることを明かす。モーセは神を見ることを恐れて顔を覆った。モーセの召命の場面である。

これを聖書の記述に沿って描くならば、山の上に燃える柴があり、主の御使いと語りかける神の手、履物を脱ごうとするモーセが描かれる、という具合である。実際そのような作例は多い。ただし、「燃える柴」の主題は4世紀の教父ニュッサのグレゴリオス以来、神の受肉と処女懐胎の神秘に結びつけて解釈されてきた。炎を神に、炎に包まれてもお傷つかない柴を聖母マリアに見立てるのである。絵画表現上で聖母子への関連づけが明らかな作例は、聖堂装飾では13世紀末頃からある。燃える柴の中にオランス型(両腕を広げた祈りの姿勢)の聖母や聖母子の半身像を描き込むもので、これらは物語の単純な絵画化とは異なり、神学上の解釈を表している。より古い時期の作例を探すと、12世紀の写本装飾にも似たものがある。コキノバフォスのヤコボスによる『聖母讚詞集』(Vat. gr. 1162) (https://digi.vatlib.it/view/MSS_Vat.gr.1162/0102)では、燃える柴の中に幼子イエスの顔を描き入れている。また遡って11世紀の写本、スミルナ(現トルコのイズミール)の『フィシオロゴス』(Smyrna, Evangelical School B.8)では、「モーセと燃える柴」の図像のすぐ上に聖母子のアイコンが小さく描かれており、神の受肉との関連が示されている。

このように、資料の画像がインターネット上に公開され、様々な資料に簡単にアクセスできることが増えた。デジタル化の恩恵は非常に大きく、これは今後もさらに拡大していくのだろう。

ところで、上記のスミルナ写本はすでに現存しない。1899年に出版された研究書に白黒写真の図版があり、これをデジタル資料で確認したのである。写本そのものは希土戦争終結期の1922年9月、スミルナの大火で焼失した。戦争や災害は、人間はもちろん文化財や資料にとっても同様に危機である。図書館や博物館などに現在残されている資料は、幸運に恵まれただけでなく、長い年月にわたり継続して保存し後代に伝えようとした人々の意思の結果であるだろう。現代では実物の保存に加えて、その画像データの作成や公開も重要な業務となっている。今、世界は疫病や政情の急変などにより先の見えない状況にあるが、この時にも、資料を保存し伝えていくために変わらず働いている人があり、その仕事が続けられていくことに希望を持ちたいと思う。

(SHIMIZU, Misa : 人文学部講師)

— 南山大学創立75周年記念 —

NANZAN ビブリオテカ ヒストリア その1

はじめに

1946(昭和21)年の南山外国語専門学校創立から75年を数える2021(令和3)年、世界は新型コロナウイルスの感染拡大により未曾有の事態の只中にある。本来であれば、75周年を祝う式典やイベントが盛大に行われるはずであったが、南山大学のキャンパス内は創立75周年の装飾が控えめに施され、9月11日、南山大学創立75周年記念式典および記念講演会がオンラインで開催された。

75周年を迎えるにあたり発足した「大学創立75周年プロジェクト」の一環として、南山学園創設者であるヨゼフ・ライネルス(REINERS, Joseph)神父の名を冠した図書館リニューアル事業「ライネルス中央図書館構想」の検討が開始された。これを機会に、南山外国語専門学校の小さな図書室から始まった南山大学図書館(以下、図書館)の歴史を、主に「建物」「蔵書」「キリスト教」の側面から繙きながら、2号にわたってお届けすることとした。この拙稿が、戦後間もない1946年からの75年の間に積み重ねてきた図書館の数々の出来事を振り返り、次に続く新たな未来を展望する機会になることを願ってやまない。

1. 南山外国語専門学校 * <五軒家町> : 西館(1946-1948)

*1947.8より「名古屋外国語専門学校」に名称変更

■図書館の規模：教員室兼図書室20坪(約66㎡)

蔵書冊数：約3千冊 → 約20千冊

南山大学の歴史は、1946(昭和21)年9月14日、至誠堂(体育館および講堂)で行われた南山外国語専門学校の開校式より始まる。校長はライネルス神父の後継者となったアロイジオ・パッヘ(PACHE, Alois)神父である。

南山外国語専門学校の校舎として最初に用意されたのは、1945(昭和20)年1月8日夜に落下した焼夷弾により炎上した南山中学校の西館の焼け残り部分であった。その木造二階建ての西館1階の階段と物置のある廊下の隣の美術室を改造した部屋を図書室とし、そこに3,000冊強の蔵書を収納したことが伝えられている。

1946(昭和21)年3月28日付「南山外国語専門学校設立申請書」の一項「十、備品図書及其他ノ設備」の欄には「金五万円ヲ以テ之ニ充当ス 図書三千冊ハ既ニ寄附ヲ受ク 約三千冊ハ既ニ米国へ注文済ナリ 米国進駐軍ヨリノ寄附ニヨリ本年度中ニ概ネ完備ノ予定ナリ」とある。

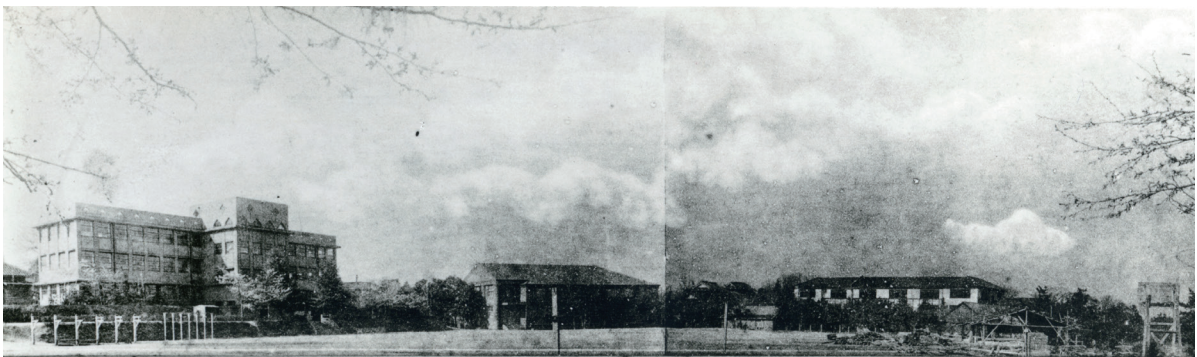
『南山大学図書館紀要』No.1(1983.3)に掲載された「南山大学図書館史」によれば、「収書の方も図書課長(当時館長職がなく実質的には現在の図書館長と同じ)の岸田準一氏が一人で細々と図書選定から整理をしていた(斉藤隆助氏談)ということ、それととも時々神田の古本屋街に出かけて行きメモをとって帰り、後日値段を交渉して取り引きを行うというような状態であった(松風氏談)」ということ、戦後まもなくということもあり資料の収集も十分なものではなかったようである。岸田準一氏は南山外国語専門学校の専任教授で、当時の学則によれば「生徒課長、法制、独語」を受け持ち、図書館の業務は教授職との兼務であったと思われる。

1947(昭和22)年3月の教育基本法と学校教育法の制定に伴い、大学への昇格を目指す気運が高揚し、学生、教職員が一体となって図書充実(=図書供出)運動が繰り広げられた。同年8月に「南山外国語専門学校」から「名古屋外国語専門学校」へ改称した後の学生新聞、『名古屋外語新聞』No.4(1947.9.14)には、「テヤーテ：学園の生命図書館」のタイトルで、「学徒と図書ほど切っても切れないものはないと思う。だからと云って我々の必要とする書物を自分で賄うことは到底出来ない。…まして一年後には新制大学昇格云々が差し迫っている。話によれば五万冊とか十万冊以上の図書を備えることがその昇格問題の、要素として挙げられるとか。学徒の益学園の生命たる図書の設備なくして昇格だなどは全く片腹痛きことである。一刻も早く我々の生命のオアシスたる図書館の完備こそ何はさて置いても第一に取り上げべき問題ではなからうか。私は度々友人間に於け

る話題として此の事を取り上げて来たが積極的な行動を取るに至らなかった事はまことに残念な事であるがここに新聞紙上をかりて生徒諸兄妹にこれを問題化せんとするものである。他校の生徒が昇格資金獲得の為に炎熱の夏休みを働き通した。しかるに本校生徒は?…首をまはし我々の所持している図書、知己諸氏の蔵書を数冊ある学園の図書として献げらるべき事について考えよう。一見これは容易ならぬ考えであろう。しかし廣く恩師、知己の方々にも文化向上の為に一肌ぬいで應援を願う事もその一手段であろう。南山の生徒がボヤーとして消極的であると云はれてもこれ位の事が出来ないでは到底大学昇格は希めない。…」の記事が掲載されている。続く『名古屋外語新聞』No.5(1947.12.10)には、「我々の手で図書館を：図書供出運動起る」の見出しで「従来本校には、図書の設備が充分でなく、研究、読書の隘路となっていたが大学昇格を目指し、早急なる図書館の開館が切望せられる時学校側の努力により、いよいよ近日中にデビューすることとなったが、当局の熱意に應え、われわれの図書館は、われわれの手での機運が生徒の間より盛上り、図書供出運動が各級より選出せられた図書委員を中心に活発に展開せられている。即ち、本年度の生徒側の目標額を五千冊と定め、一人平均二十冊を、個人目標額とし、自己若しくは縁故をたどってしゅう集(ママ)することとなった。これは原則として無償とするも、事情によっては考慮することとなっている。この運動は総て生徒の発議によるもので、その成果は注目されている。」とある。

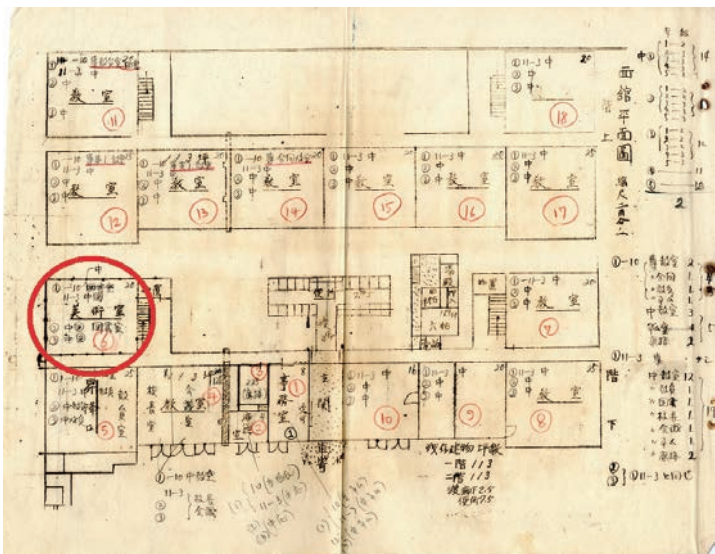
また、この頃、旧名古屋陸軍幼年学校の所蔵図書を譲りうけることになり、『南山学園の歩み』に次のように記録されている。「この蔵書は小牧市にあった幼年学校から終戦直後に西尾市の私立図書館岩瀬文庫に移され、未整理のまま放置されてあったもので、岩瀬文庫の必要とするものを除き、残りの各書物の奥付に明記してある定価の三倍を支払うことで引きとることになった。輸送は昭和二三年秋九月から十月に行なわれ、その前から図書館員らは西尾に出張した。搬入図書の整理は学生の応援をえて十一月半ばまでかかった。搬入書籍数は一万五千冊で、総額は約十二万円、これで外専の蔵書合計は三万余となった」。このことについては「南山大学図書館史」の中にも、直井豊氏(本学名誉教授)の回顧談として、米軍のトラックで直井氏がパウルス・チャブリッキ(CZAPLICKI, Paulus)神父(「1948年11月図書課長就任」とあり)、木村太郎氏(第3代図書館長)、岸田準一氏などとともに岩瀬文庫と五軒家町の校舎を往復した様子などが詳しく残されている。

学生新聞『旬刊外語』No.2(1948.10.11)には、「図書館愈々充実」の見出しで「新学制による新制大学はその設立の条件として完全なる図書館を要望し、これは申請各校の頭痛の種となっていたが今回本校へ某所々蔵の書籍約一万五千が到着し無聊をかこっていた図書館もその整理に転手古舞(ママ)である。これで本校の図書館は合計三万有余の冊数をそろえる事となりまだまだ満足とはいえないが可成り充実した設備を持つ事となった。この書籍の中には各種百科辞典各種全集等まとまったものを相当含み且つこれまで不足であった法律経済歴史等人文科学の全野にわたって豊富な資料を提供している。…一方今迄なかった館外貸出の制度が早急に実施される事がつよく要望されている。」とあり、この「書籍約一万五千」が旧名古屋陸軍幼年学校所蔵資料にあたると思われる。



1947(昭和22)年 学園全景(向かって左より本館、至誠堂、西館)(提供:南山アーカイブズ)

*本館は、スイスの建築家マックス・ヒンデル(HINDER, Max)氏によって南山中学校の校舎として設計され、1932(昭和7)年に完成した。戦時中は名古屋連隊区司令部庁舎に接收、戦後に連隊区司令部が引き払った後、再び使用されるようになった。現在もこの本館は南山学園発祥の建物「南山学園ライネルス館」として存続し、南山アーカイブズにより南山学園に関する史資料の収集・整理・保管・公開が行われている。



西館平面図 (○部分が図書室) (提供：南山アーカイブズ)

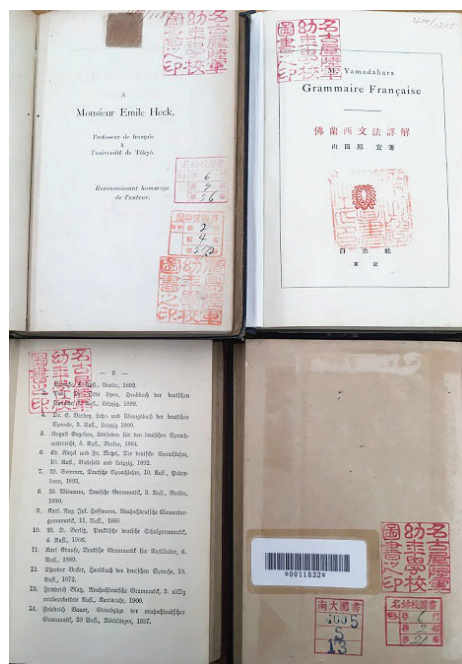
では、本学園の先人はなぜ旧名古屋陸軍幼年学校の蔵書に目を付けたのであろうか。まずは陸軍幼年学校について簡単に紹介しておきたい。将来の陸軍将校候補者を養成する学校であり、幾度の制度変更はあるものの1920(大正9)年以降では、陸軍士官学校へ進学する前の予科に位置づけられる。受験資格は満13歳以上・満15歳未満であり、生徒はそこで3年間(名古屋等の陸軍地方幼年学校修了後の陸軍中央幼年学校の2年間を含めれば5年間)学ぶことになる。つまり、現在の中学生・高校生がおおよその在校生となる。当時のエリート中のエリートである陸軍幼年学校の生徒は、受験資格年齢到達前の男子にとって羨望的であり、大変な高

倍率であったらしい。頭脳明晰だけでなく、強靱な肉体と精神が求められたことはいうまでもない。

しかし、エリートといえども現在の中高生世代が利用していた資料を高等教育機関附属図書館の蔵書として購入する意図にしては説得力に乏しい。授業で使われたはずの『軍事精神訓』(訂正再版)(陸軍中央幼年学校, 1918)によって、儒学と国家神道に基づく教育が行われたであろうことは確認できても、ミッションスクールとしての本学園に似つかわしくないことは明らかである。旧名古屋陸軍幼年学校の払い下げ資料に漢籍が多数含まれていることは、かつて慶應義塾大学・斯道文庫の大沼晴暉・高橋智の両氏により確認され、「漢籍の基本図書をはほぼ揃えている」と評価されているにしても、また南山外国語専門学校に中国語科を設けたことに照らしてもなお、旧蔵書の積極的な入手活動に領けるだけの理由がない。

ここで注目されるのが陸軍幼年学校のカリキュラムである。旧制中学の2年生から5年生が学ぶ一般課程に加えて初歩的な軍事学を修めるが、さらに外国語教育にも注力されていたのである。英語はもちろんのこと、陸軍関連軍事の先進国の母語であるフランス語、ドイツ語と当時の仮想敵国のロシア語までもが選択肢として存在した。すでにお解りのように、外国語を学ぶための資料が陸軍幼年学校に豊富に所蔵されていたと考えると何ら不思議ではない。恐らくそうした蔵書を、外国語専門学校のための資料として念頭に置いていたのではなかろうか。ひとつの根拠として、旧蔵書の標題紙などに赤字で「400/X,XXX」(「X,XXX」は数字)などと書き込まれているが、DDC(デュイ十進分類法)の「400」と思われ、それは「Language」の分類であるから、言語関係の資料が少なくとも数千冊は存在したことは想像に難くない。もちろん岩瀬文庫が先に必要なものを抜いたとのことであるから、望むものすべてを入手できた訳ではないだろう。とはいえ、当初は英語科および中国語科(翌年、華語科に改称)により設立された外国語専門学校がすぐに仏語科および独語科を増設した直後でもあり、各学科でのその後の学習・教育にも少なからず役立ったのではないと思われる。

本当は払い下げ図書の一覧があれば一番よいのであるが、それがないため全貌の確認が困難である。代わりに、当時受け入れられたと思しき資料のデータから外国語学習用資料を抜き出すなどして、1冊ずつ「名古屋陸軍幼年学校」の蔵書印を視認する方法もあるが、小文としては一旦このあたりに留め、さらなる調査は別の機会に譲りたい。



「名古屋陸軍幼年学校」の蔵書印が押された南山大学図書館の蔵書

2. 名古屋外国語専門学校・南山大学<五軒家町>：至誠堂半地階(1948-1951)

■図書館の規模：閲覧室(275㎡、120名収容) + 書庫(99㎡)

蔵書冊数：約20千冊 → 約43千冊



1934(昭和9)年頃の至誠堂外観(半地階が図書館)
(提供：南山アーカイブズ)

において、連合国軍司令部(GHQ/SCAP)の民間情報教育局(CIE)が全国23か所に設置した米国式の図書館のひとつ、名古屋CIE図書館のことだと思われる。))

至誠堂は、「一部鉄筋、一部木骨コンクリート建、地階とも三層。地階一二八坪、一階一四三坪、二階十五坪(後に三〇坪)、総計二八六坪」の建物で、1934(昭和9)年12月に完成し、皇太子誕生の佳日にちなんで「至誠堂」と命名され、1935(昭和10)年には本館と廊下で結ばれた。代用図書館として使用された半地階は、「はじめ銃器庫、剣道用具等の置場、更衣室、シャワー室」であったようである。

南山高等学校および南山中学校クラブ発行の新聞『N.J.S.』No.5(1949.2.10)には、「学園新築着々進行」の記事の中で代用図書館の様子が次のように掲載されている。「講堂地下室=学園講堂(注：至誠堂)の地下室北向きにある新説(ママ)の立派な門をくぐると、靴音もあたりにこだまする十数間四方の部屋には、百五十名程が収容出来るテーブルと椅子が整然と並べられ、南方から数本の光線が射して静寂そのもの“静けき真夜中・・・”の聖歌が壁にかけられその下には沢山な種目のぎっしりつまった目録が置かれてある、掛の先生のお話によればこの一年に集った書籍二万二千冊、しかしもっと大きな図書館新設を計画中で、それまでは外語生徒の図書館とホールの兼用、本格的図書館設置のあかつきは、ここは理科標本類の部屋になるとのこと」。

1949(昭和24)年3月25日、前年の暮れに渡米したパッヘ神父は約3か月に及ぶ旅から帰国する。『N.J.S.』No.7(1949.5.7)には「顕微鏡、タイプなど：パ学園長の土産」と題して「・・・又書籍だけでも六千冊とそれを収容するモダンな図書館の設備、更にその書籍名を記入するカードとカード箱、その他色々なものを持ち帰ったむね語られた。」とあり、学園の発展に向けた関係先との相談や寄付金のお願など「パッヘ学園長は見事その目的を達せられ」たようである。

当時、大学図書館に必要な4万冊の書籍を収集するために関係者が奔走していた様子がうかがえる資料が他にもある。1948(昭和23)年7月31日付「南山大学設置認可申請書」の「第十四、将来の計画」の「三図書、標本の計画」には、「図書は現在二万冊を算えるが、之も近々に一ヶ年に充実されたものである。北米合衆國を始め、諸國の関係者の本校への援助は着々現はれて、図書は大学完成年度迄に二十万冊にし度いといふ希望も達せられることと思ふ。(現にアメリカより送られつあって、毎月冊数は増加してゐる)。」とある。

1949(昭和24)年の大学開設にあたり、とりあえず代用図書館の工事が急ピッチで進められたようである。旧名古屋陸軍幼年学校所蔵資料の搬入と軌を一にするように、1948(昭和23)年10月23日から至誠堂半地階を閲覧室と書庫に改造する工事が始まる。ほぼ1ヶ月半の突貫工事で、同年12月3日にはデモクラシーホール館長コープ氏の来席を得て、厳粛のうちに図書館の開館式が行われたのである。デモクラシーホールは、原書入手が困難なこの頃に、市電大津橋停留場近くに米国占領軍の好意で建てられた英語図書館であるとの紹介が『名古屋外語新聞』No.5(1947.12.10)に掲載されている。(戦後日本



1949(昭和24)年頃の至誠堂図書館
(提供：南山アーカイブズ)

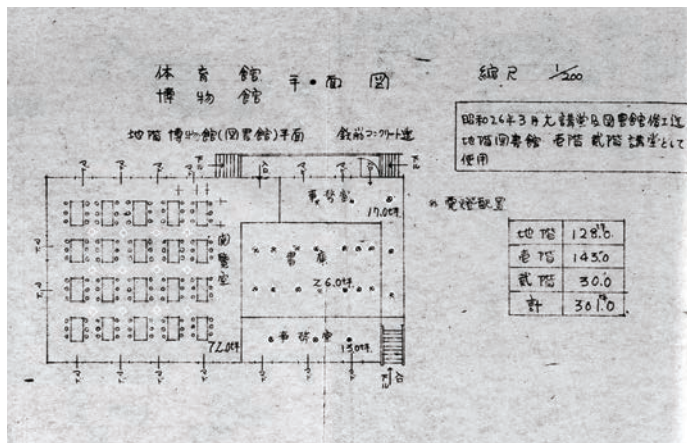
また南山アーカイブズに残されていた「名古屋外国語専門学校図書館日記」からの手書きの抜粋メモには「パッへ校長今夜九時四十五分の列車にて渡米」(1948.12.13)、「CIE(Civil Information and Educational Section、民間情報教育局)図書受領報告のため県庁へ出庁、手続きを終了及び雑誌五十冊入る」(1949.2.8)、「南米より図書五〇〇冊、米国より図書一〇四冊、ピオ館より図書」(1949.2.22)、「パッへ校長帰国土産の書籍十五箱入る」(1949.4.7)、「午前十時より大学開校記念式、午後よりアメリカより箱六十六ヶ入る」(1949.5.2)、「午前中本の数をかぞへました、午後より昨日来た箱を開ける、宗教八四八・家政四五・自然科学五五四・人文科学六七八・社会科学一五七・雑誌一〇六・計二、三八八冊」(1949.5.4)、「朝より箱を開ける、午後箱を全部開ける」(1949.5.6)、「二日に入った箱の本の数をかぞへる、辞書二七六・宗教二八七・自然一六五七・社会六三七・人文一九九七・合計三六五六」(1949.5.9)「合計」の横に鉛筆書きで「? 四八五四」とある。

学生や教職員から供出された図書の他に、旧名古屋陸軍幼年学校の旧蔵書や各国のカトリック諸団体からの寄贈図書等を中心に、最初の蔵書群が構築されていった様子が見える。

1949(昭和24)年4月、名古屋外国語専門学校を前身として、南山大学は開学する。定員100名の文学部英文・仏文・独文・中国文の1学部4学科からなる大学で、初代学長はパッへ神父。1949(昭和24)年5月2日、至誠堂にて南山大学の第1回入学式が挙行された。

至誠堂より大講堂地階へと移行してからの図書館については次章で詳しく紹介するが、移設時点での蔵書「和書17,031冊、洋書26,436冊、合計43,467冊」の構成について少し分析してみたい。なお、以下の数値の元データは、現在の図書館システムから資産番号(資料ID)のNo.1~No.45000までを抽出したものと看做す。抽出した資産番号の数が蔵書冊数より多くイコールでないのは、雑誌等にも資産番号が付与されてNo.43467のあとにも採番された可能性があることなどが理由である。加えて、後述の図書館長事務取扱であったエヴァ・ペリー(PERRY, Eva M.)氏により廃棄されたためにすでに除籍扱いになっていた(氏は合理的思想の持ち主であったため、利用されない資料を配架しておくのは書架スペースの有効活用の観点から非効率であるとの考えがあったようで、不要と思われた資料はどんどん廃棄されていた)、はたまた何らかの事情により空番になった資産番号が後年使用されたり等々の可能性もあって、およそ正確とはいえない数値であることはお断りしておかなければならない。しかし、こうした粗い数値も、蔵書構成全体の大まかな実態感覚と雰囲気をつかむうえでは有益だと考えている。

さて、45,000冊(番)のうち、図書は約37,000冊であり分母となる。和洋別では、和が約13,500冊(中国語の約3,000冊を含む)、洋が約23,500冊である。前述の蔵書数同様に和書に比して洋書が圧倒的多数であるのは本学らしいというべきであろうか。洋書の言語別では、英語:約13,500冊(洋書全体の約57%)、フランス語:約1,600冊(同約7%)、ドイツ語:約5,000冊(同約21%)、スペイン語:約1,500冊(同約6%)であった。その他、イタリア語やラテン語、ギリシア語は不思議でないにしても、アラビア語やチェコ語といった当時は珍しい言語も存在する。一方、分野別内訳としては、日本十進分類法(NDC7版)でいうところの総記(000番台):約2,500冊、哲学・心理学・宗教(100番台):約6,600冊(全体の約18%)、歴史・地理(200番台):約4,800冊(全体の約13%)、社会科学(300番台):約5,200冊(内数として、政治:約600冊、法律:約1,000冊、経済・経営・財政:約1,300冊、社会学:約700冊、教育:約900冊、民俗・民族学:約300冊)(全体の約14%)、自然科学(400番台):約1,900冊(全体の約5%)、工学・技術(500番台):約300冊、産業・商業(600番台):約300冊、芸術・美術(700番台):約1,000冊(全体の約3%)、語学(800番台):約3,200冊(全体の約9%)、文学(900番台):約11,000冊(内数として、日本:約1,500冊、中国:約500冊、英米:約4,500冊、フランス:約1,200冊、ドイツ:約1,500冊)(全体の約30%)、となる。



至誠堂図書館平面図
(1948年7月31日付「南山大学設置認可申請書」に掲載、
提供：南山アーカイブズ)

気になるキリスト教関係(190番台)は約2,200冊であって、全体の約6%となる。100区分分類での割合であるから平均すれば1%になるところの6倍となり、やはり本学の教育理念に鑑みてもこの分野の収集には重きを置いていたと察せられる。また、当初の設置学部・学科が「文学部:英文学科/仏文学科/独文学科/中国文学科」の1学部・4学科であったことに照らしても、蔵書構成とそれなりの相関関係が見られるといて差し支えないであろう。さらに、「南山大学設置認可申請書」にある「南山大学設置要項」および「学則」のなかで、学部・学科に対応する「専門(学)科目」以外に次の「一般教養学科目」を用意されていた旨の記載がある。人文科学関係としては「哲学、宗教学、史学、考古学、民族学、言語学、英語、フランス語、ドイツ語、中国語、古典語、漢文、国語、文学論、修辞学」、社会科学関係としては「法学、政治学、経済学、社会学、商学、社会事業学」、自然科学関係としては「数学、地学、生物学、遺伝学、人類学」である。この一般教養学科目を学ぶために専門科目に係るもの以外の資料を整備したことは容易に推察できる。そして、1950(昭和25)年には、文学部の4学科をそれぞれ「英語学英文学科/仏語学仏文学科/独語学独文学科/中国語学中国文学科」に改組すると同時に哲学科と教育学科を増設し、社会科学部を新設して「法経済学科(法学、政治学、経済学の3専攻)/社会学科」を置くことを構想していた(実際には、1950年に文学部に社会学科を設置、1952年に社会科学部を新設する機会に社会学科を新学部に移し、併せて人類学科を設置)。つまり今度は専門科目を学ぶための資料として人文・社会科学分野を追加受入していったのであろう。これら学部・学科の設置状況や教育課程と蔵書構成とを比較して、理想的な蔵書数であるとか適切な分野ごとの比率であるなどと断言できるはずもないが、それなりに戦略的な、単なる数合わせではない選書が為された証左である、という程度のことは許されるのではなかろうか。

3. 南山大学<五軒家町>：大講堂地階(1951-1964)

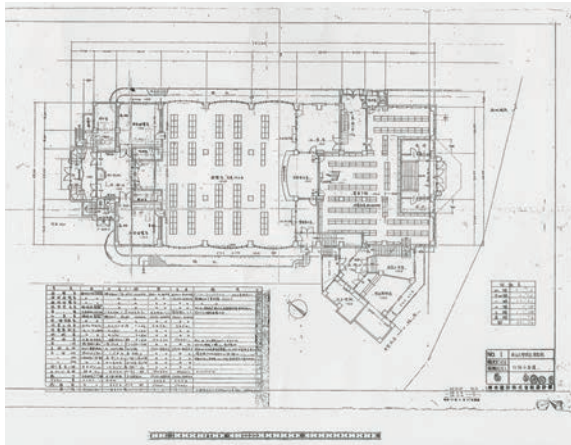
■図書館の規模：閲覧室(418㎡) + 閉架式書庫(363㎡)

蔵書冊数：約43千冊 → 不明

1951(昭和26)年8月、五軒家町の敷地東北端に三階建ての大講堂が新たに建設された。『南山学園の歩み』には、「さしあたって必要な校舎のため、第一に本館と体育館との間に西翼校舎を、第二に東翼校舎をのばし、その東北端に大講堂と図書館を新設するなど、南山中学校創設当初の案を発展させ、これで第一期工事を完了とする。」とある。新設の大講堂の地階の閲覧室と二層の閉架式書庫に43,467冊の蔵書を収容し、5年にわたる大学図書館としての建物と資料の整備に一定の目的が立ったことになる。



大講堂外観(地階が図書館)(撮影日:1951.9.14)(提供:南山アーカイブズ)



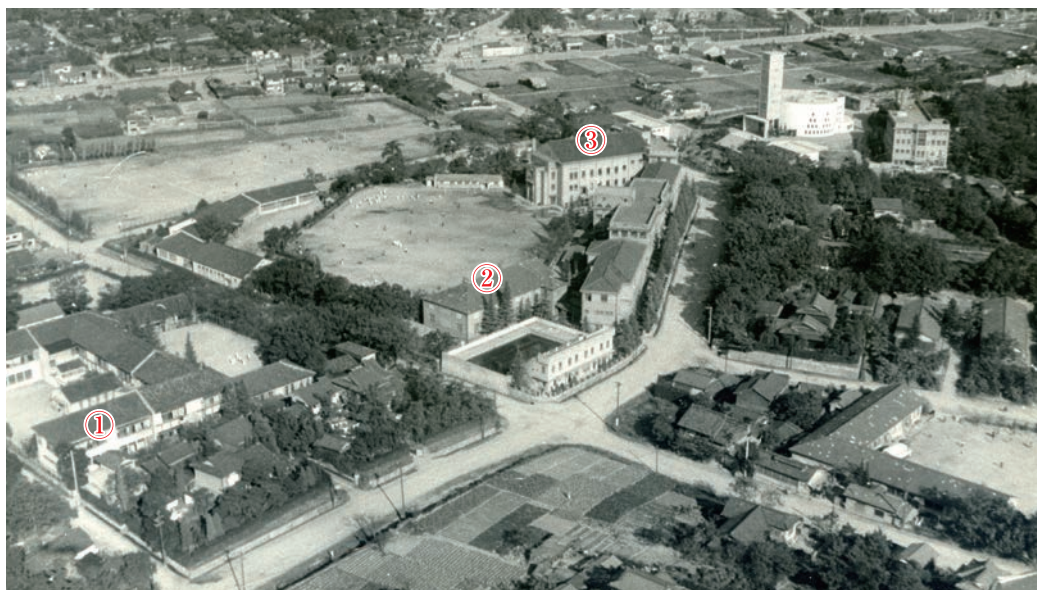
大講堂図書館平面図（「1950.3.29 訂正版」と有）
（提供：南山アーカイブズ）



大講堂図書館閲覧室（提供：南山アーカイブズ）



大講堂図書館閲覧室（提供：南山アーカイブズ）



1960（昭和35）年頃の五軒家町キャンパス全景（提供：南山アーカイブズ）

図書室・図書館所在の変遷

- ①西館：1階図書室（1946-1948）
- ②至誠堂：半地階図書館（1948-1951）
- ③大講堂：地階図書館（1951-1964）

1951(昭和26)年9月13日には、アメリカよりペリー氏が図書館長事務取扱として着任する。1949(昭和24)年のアメリカへのカトリック系大学視察時に、パッヘ神父はペリー氏が在職するロヨラ大学を訪問しているの、その際に専門家の招聘について何らかの交渉または相談が行われたのではないだろうか。いずれにしてもこれまで建物の整備に必要な数の資料の収集に追われていた図書館に、図書館経営の権威であるペリー氏が着任し、ようやく図書館運営といった視点が加わったのである。2年間の任期中に、図書館への資料集中管理、海外直接発注、辞書体目録の編成、延滞料の徴収などアメリカの図書館運営を進めていった。学生新聞『旬刊外語』No.2(1948.10.11)には「今迄なかった館外貸出の制度が早急に実施される事がつよく要望されている。」とあり、この間に館外貸出や延滞料徴収の制度など、図書館サービスの体制も順に整っていったと思われる。



ペリー氏：写真中央（撮影日：1952.10.2）
（提供：南山アーカイブズ）

そして1951(昭和26)年11月8日から11日まで、駐日ローマ教皇庁使節フルステンベルグ大司教を迎えて、第一期工事完成を祝賀する式典が盛大に行われた。語学劇や講演会のほかに、田北耕也教授(「キリシタンに導かれて：田北耕也氏のこと」『カトリコス』No.34(2019.11.1)参照)が収集した潜伏きりしたんに関する資料を展示した「きりしたん資料展」も開催された。また、「そのひる、図書館閲覧室では財界、学界の名士たちが高位聖職者らをかこんで祝杯をあげた。」とあり、図書館で式典への参列者を招いた午餐会が催された記録が残されている。この頃はたびたび閲覧室で食事が催されていたようで、古(いにしえ)の閑閑な図書館の様子が伝わってきて興味深い。

また、この頃に、図書館に大変貴重な資料が加わったことが、学生英字新聞『NANZAN HERALD』No.9(1959.4.25)の「BOOK TALK」で紹介されている。執筆者は第2代図書館長のテオドール・ファンザイル(VAN ZIJL, Theodor)神父。その資料『倫理神学大全(Summa Theologica Moralis)』は、フィレンツェの大司教アントニウスによる神学書で、当時の社会経済的見解を知る上で重要であるばかりでなく、1477年から1479年にかけて活版印刷により印刷された書物として印刷文化史上大変貴重なものである。

活版印刷は、羅針盤・火薬と並ぶ世界三大発明のひとつとして、その後のヨーロッパ社会生活に大きな影響を及ぼしたとされている。ヨハネス・グーテンベルク(GUTENBERG, Johannes)が活版印刷を発明し、グーテンベルク聖書と呼ばれる最初の印刷聖書「四十二行聖書」を完成させたのが1455年頃で、それ以降1500年までに活版印刷により刊行された本は、揺籃期の印刷本という意味でインキュナブラ(Incunabula)と呼ばれている。当資料はニュルンベルク出身の印刷業者で200種以上の書籍を出版したといわれているアントン・コーベルガー(KOBERGER, Anton)によって出版されたインキュナブラで、黒の単色刷による印刷で、活版印刷の特徴であるプレス跡がはっきりと残されており、さらに人の手で彩色が施されている。また各巻の最初の頁の書き込みから、1638年にドイツ・バンベルクのカプチン・フランシスコ修道会がこの資料を所有していたことがわかるが、記事の中では「A few years ago Nanzan University Library acquired a rather rare work which deserves more attention.」とだけあり、このような貴重な資料がどのような経緯を辿って、図書館にやってきたのかは今に至るまでわからないままである。



南山大学蔵書
『倫理神学大全 (Summa Theologica Moralis)』

Antonino Pierozzi, Archbishop of Florence, 1389-1459.
Summa Theologica Moralis. - Nuernberg : Anton Koberger,
1477-1479. 4 vols.
*各巻の第1頁の下欄に「Loci Capuccinorum Bambergae
1638 (1638年バンベルクのカプチン会所有)」の書き込みがある。

図書の蔵書となる前段の「選書」に関して、南山アーカイブズで興味深い史料に目が留まった。当時“Acting Director of Libraries”(“Libraries”と複数形となっているのは、人類学研究所—当初は、人類

学民族学研究所一の「図書館」等を意識してのことであろうか)であったペリー氏の名でタイプされ、“All Members of the Library Board”(現在の「図書館委員会委員」に相当するのであろう)向けに発せられた文書である。日付は“June 24, 1952”となっており、“Notice”には(当学年第1セメスターの)“The first meeting”および“on Wednesday, June 25, 1952, 3 p.m.”との記述があって、翌日の午後3時より、第1回会合が開かれる予定が読み取れる。6月下旬に第1回会合、しかも前日に案内されているのはその頃の何とも緩やかな状況が垣間見えて微笑ましくもあるが、それはさておき、“Agenda”にある“III Discussions”に注目したい。そのなかに“1) Re Library Budget”とあり、さらに“a) General principles of library budgeting, b) Nanzan University Library Budget, *Budget Report for 1951/52, *Budget for 1952/53, c) Breakdown of Library Budget for 1952/53 according to Faculties and Departments”と記載されている。ここから見えてくるものについて、若干の考察を加えてみたい。

現在では当然かもしれないが、あらためて目を瞞るべきは図書館予算について当時すでに、a) 予算化に係る一般的な原則を設定していたこと、b) 前年度の予算と執行額を参考に次年度予算を検討していたこと、c) 学部・学科に予算と選書を丸投げするのではなく、学部・学科構成を踏まえて部門・分野ごとに予算設定していたこと、である。a)に該当する文書が見当たらず甚だ残念であるが、b)・c)については具体的に“Library Budget 1951/52/53”と題した一覧表が残されている。“A. Faculty of Arts & Letters”(文学部)と“B. Faculty of Social Sciences”(社会科学部)とに分けられ、それぞれ“Department”、“Budget allotted [1951/52] (“1951/53”とタイプされたものがボールペンで“1952/53”と訂正されているが“1951/52”の誤りかと思われる)”、“Sum paid 1951/52”、“Budget allotted 1952/53”の項目が設けられている。そして、文学部の“Department”の内訳は次のように細分化され—“English / French / German / Chinese / Japanese / Philosophy & Religion / History / Education / Law & Politics / Commerce & Economics / Sociology / Natural Sciences / Music & Fine arts, Physical Education / General culture / General periodicals / General Reference / Reserve / Ethnology / Library”—、通貨表示はないが円貨と思しき金額が表示されている。社会科学部は“Anthropology Department / Sociology, Economics, Law & Politics”の区別はあるが、1952年度新設のためであろう“Budget allotted 1952/53”の金額のみ記載されている。社会科学部の“Department”は文学部のそれと重複するものもあるが、文学部の方は一般教養科目で利用する資料の選書を含むとも考えられる。文学部の英語表記を“Faculty of Arts & Letters”としているが、単なる「文芸」ではなく「リベラル・アーツ(liberal arts)」を意識して一般教養科目に係る部門・分野の予算を文学部のなかに配分した、と捉えれば首肯できる。

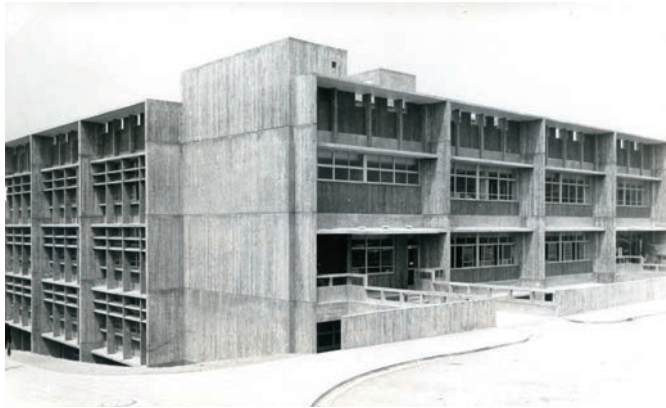
その他、気になることとしては—“Reserve”とあるがすでに現在の指定図書の類が存在したのであろうか。さらに驚くべきことに、“NAGOYA UNIVERSITY LIBRARY BUDGET 1951”なる文書と一緒に添えてあり、端数からして予算額ではなく執行額だとは思われるが、字面どおりなら本学の隣にある名古屋大学の図書館の資料であろう。金額はさすがに本学とは桁違いであるが、部門・分野ではなく部局図書館ごとの執行額のようにも見受けられ、これを本学でどのように参考としたのか—等々興味は尽きない。いずれにしても、本学では、予算の検討に際して都度揺れが大きくならぬよう原則を定めており、早い段階から予算設定と選書、執行評価が多少なりとも組織的・計画的に為されていたことは注目に値しよう。

4. 南山大学<山里町>：地上3階・地下1階(1964-1980)

■図書館の規模：地上3階・地下1階(延べ4,993㎡)

収容可能冊数：約30万冊、閲覧席：400席

1964(昭和39)年3月、山里町の地に、地上3階・地下1階の新しい図書館が完成した。新しい校舎は、建築家アントニン・レーモンド(RAYMOND, Antonin)の設計による総合計画に基づき、第一期工事で、大学本部(管理棟)・食堂棟・研究室棟・教室棟(南棟・中央棟・北棟・600人棟)・図書館の8つの建築群が建てられた。レーモンドは、これ以前にも東京女子大学と国際基督教大学で図書館を設計しており、国際基督教大学で実践した当時珍しい全館開架制を本学の図書館の設計にも踏襲している。『Hominis dignitati 1932-2007：南山学園創立75周年記念誌』には「図書館は全面開架制をとり、図書館委員会の意見を参考にして、三〇万冊収容、座席数四〇〇、



1964 (昭和 39) 年の図書館外観東北面 (提供：南山アーカイブズ)

図書館と同系の設計であるが、格納書籍30万冊と2倍の規模をもっている。書架の寸法から決定された図書館の柱スパンが基準となって、それにレディーメードのアルミサッシュの寸法を使用することによって各建物のラーメンのモジュールが決められ、柱スパンとして5.4m、7.2m、8.5m、10.8mが採用されているのであるが、図書館の構造には同高の菱目型梁を持つフラットスラブが全体に使用され、リターンダクトを柱の中に収める等、書架の格納を主に設計された。動線計画から中間層の3階に主玄関が取られているが、1階には機械室、電気室のほか課外活動部室がもうけられている。図書保存のため内部の清潔さと温湿度を一定にする冷暖房空気調節装置としてヒートポンプが使用されているが、このために限られた深井戸の水は上水として濾過し全館自家給水に再利用される」。

現在の図書館の建物は、1980 (昭和55) 年に行われた地下書庫の増築工事で東側の外観が、当時とは異なる姿となっている。図書館前にあった駐車場と図書館の正面入口をつなぐ陸橋はすでに無く、光や風を取り込んでいた地下1階の東側の外壁部分は書庫につなげるため地中に埋められてしまった。しかしながら東側の外観部分を除けば、その他の外観も館内も建設当時とあまり変わらぬ姿を今なお留めているといえよう。外壁は打ちっぱなしのコンクリートにくすんだ赤い色が施され、東西南北でそれぞれ適切な角度に設計されたコンクリートのルーバーは外部からの日光や風雨を一定に遮っている。館内のモザイクの床はすでにカーペットで覆われてしまっているものの、閲覧室の天井などの構造は当初のままである。

キャレルと呼ばれる個人研究ブースも窓際に約一〇〇名分があり、三階には音楽資料室とオーディトリウムも設置された。地下一階は、人類学研究所の陳列室(後にG棟地下に移転し、博物館となる)とチャペルがあった。図書保存の意味から全館ヒートポンプによるエアコンが入った。」「冷房は、図書館とコンピュータ設置予定室のみ設置された。」「図書館の約五万冊の図書は、その整理には六月初めまでかかった。」とある。

『建築』No.48(1964.9)には、レーモンドによる図書館の設計について、次のように紹介されている。「オープンスタック形式の図書館はICU図書館

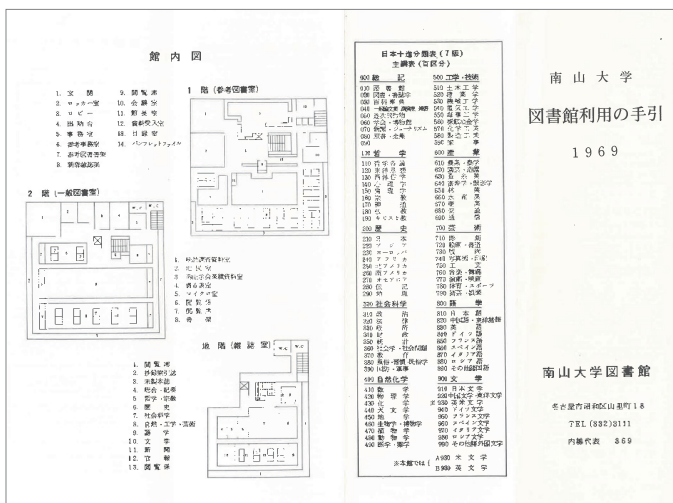


図書館閲覧室 (提供：南山アーカイブズ)

の、閲覧室の天井などの構造は当初のままである。

レーモンドの南山大学設計については、別に多くの資料があるので詳細はそれらに譲り、いったん筆を擱くこととする。

「建物」以外の主要な構成要素である本学図書館「蔵書」にまつわるあれこれについてもここまで眺めてきたが、どのような図書館も開設からしばらくの初期にはある程度のまとまった蔵書を要することは疑い得ない。その初期蔵書にも各図書館の特色が現れるものである。本学であれば、「旧名古屋陸軍幼年学校払い下げ資料」「倫理神学大全」「学生校払い下げ資料」「他からの供出寄贈資料」「他の購入・寄贈資料」のいわば4つの礎石の上に、図書館がかたちづくられたといえるのかもしれない。「旧名古屋陸軍幼年学校払い下げ資料」は、今となっては市場価値も高くなく稀覯に属



図書館館内図 (『南山大学図書館利用の手引き』(1969) 掲載)

図

するものは数少ないが、一部は現在でも貴重書室に収められている。一般的には「貴重書」に相当しなくとも、本学にとってはやはり大事な「貴重書」なのである。そして『倫理神学大全』は相変わらず本学コレクションの目玉として貴重書室に鎮座している。

その後も毎年度必要な資料を少しずつ充実させ、学部・学科等の改組の折にはより多数の資料をまとめて整備してきた。ただし、数が多ければよいという訳ではない。他方、何が不要かは一概にはいえない。近年、本学でも遅まきながら図書館資料の収集と蔵書構築に係る方針を整備してきた。また、適切かつ十分な資料を所蔵しているかどうかの評価や、今後どのように適切な選書を継続して実施するか工夫は、図書館の運営にとって必須である。そして今まさに、蔵書の評価とその基準や、選書の方法および評価とその基準、これらと密接に結びつく予算の在り方などについて、精査と検討を継続して行いつつある。これらの古くて新しい課題について、本稿の執筆はあらためて考えさせられる好機となった。

その1のおわりに

カトリコス執筆にあたっては、毎回南山アーカイブズに調査をお願いしてきたが、今号のテーマは75年前の創立当初に遡ることでもあり、学生新聞の閲覧や写真の提供など、南山アーカイブズの村上麻里さん、岡本佳子さんに数回にわたり時間を割いていただくことになった。この場を借りて、改めてお礼を申し上げたい。

「NANZAN ビブリオテカ ヒストリア その1」では、南山外国語専門学校の創立より南山大学設立を経て山里町へキャンパスが移転した後までの、約35年間の図書館の歴史をまとめたところで紙面が尽きてしまった。2022年11月発行予定のNo.37では、新設当初の地上3階・地下1階の建物に地下2階が増築された頃から現在に至るまでについて、書き進めるつもりである。その1では「キリスト教」についてあまり触れられなかったが、次号では「キリスト教コーナー」や「カトリック文庫」、過去の各種企画・催事を紹介することができるはずである。その前段として本学図書館の歴史を丹念に辿ったことで、その2での「キリスト教」とのかかわりにおいてもさらに理解を深めていただけるものと考えている。

【参考・引用文献】

- ・『南山学園の歩み』(南山学園, 1964)
- ・『南山大学五十年史』(南山大学, 2001)
- ・『南山大学五十年史：写真集』(南山大学, 1999)
- ・『私の中の南山：先達による歴史への証言集』(南山大学, 2001)
- ・『Hominis Dignitati 1932-2007：南山学園創立75周年記念誌』(南山学園, 2007)
- ・『名古屋外国語専門学校史料集』(南山学園史料集, 1) (南山学園, 2005)
- ・『南山大学設置認可申請書』(南山学園史料集, 13) (南山アーカイブズ, 2018)
- ・「南山大学図書館史」(南山大学図書館紀要)1, p.87-100, 1983.3
- ・「南山大学図書館史」(南山大学図書館紀要)2, p.144-162, 1984.2
- ・「南山大学」レーモンド建築設計事務所(建築)48, p.38-70, 1964.9
- ・「ANTONINO PIEROZZIのSUMMAについて」テオドロ・P.ヴァンザイル(館灯)1, p.5-13, 1961.12
- ・雪嶋宏一『本邦所在インキュナブラ目録』(第2版)(雄松堂出版, 2004)
- ・「南山大学図書館所蔵和漢書目録」大沼晴暉, 高橋智(南山大学図書館紀要)6, p.65-112, 1999.5
- ・野呂理栄子『陸軍幼年学校体制の研究』(吉川弘文館, 2006)

(加藤 富美、石田 昌久)

南山大学図書館「カトリック文庫」

「カトリック文庫」では、近代日本におけるキリスト教史の研究に資する資料群の構築を目的として、明治・大正・昭和初期のキリスト教関係出版物等を収集しています。これまで、購入はもとより、多くの皆さまからの貴重な資料の寄贈によって、コレクションを充実させてきました。この場を借りて、心よりお礼を申し上げます。

南山大学図書館カトリック文庫通信

カトリコス No.36 2021.11.1発行

編集・発行：南山大学図書館 カトリック文庫グループ
〒466-8673 名古屋市昭和区山里町18

Phone : 052(832)3707 / Fax : 052(833)6986

* 図書館Webページでもご覧いただけます。

<http://office.nanzan-u.ac.jp/library/>